

分類といかに向き合うか

阿久澤弘陽（京都大学）

1. はじめに

文法記述において分類は(ほぼ)不可避の作業である。多くの場合、分類は現象に接近するための第一歩であり、被説明項の構成・限定にも必須である。“よい”分類とは、①何らかの形にサポートされる、②明確な基準があり(=明瞭性を満たし)相互排他的である、③網羅的である、④理論的基盤がある、といった基準をできる限り満たすものであるというのが一般的な見解であろう(田窪 1998 を参照)。特に、分類自体が何らかの理論的(例：説明概念になる)または実践的(例：言語教育において有効である)な目的の達成を志向する場合においては、上記の基準をできるだけ遵守することが望ましい。

しかし、言語現象には連続性があるのが常であり、必ずしも全ての現象が明瞭な基準によって切り分けられるわけではないし、また、表層的な分類では捉えきれない微細なニュアンスが文法記述に有効なこともある。同時に、分類の粒度も重要である。細かい分類粒度による現象の整理は、記述の精度を上げ個々の事実を的確に捕捉するという正確性に資する反面、現象限定的な記述ともなり得るという意味で経済性の低減と表裏一体である。こうした点に、自然言語の分類という作業の技術的な難しさがある。

本稿では、発表者の既発表論文における(述語の語彙意味)分類の省察を通して、上記④の理論的基盤に依拠することが分類において最も重要であることを示す。以降、2節・3節では、個々の具体的な分類事例を紹介し、①②③がいくぶんか犠牲にされても、④によって分類は価値を失わないことを示す。4節ではさらに踏み込んで、④が分類と不可分であることを論じる。なお、先行研究を含む各々の分類方法と分析の是非を問うことが本稿の目的ではないことをあらかじめ断っておく。

2. 「つもりだ」の語法研究と分類

態度述語の「(xがP)つもりだ」には様々な用法が観察されている。多くの先行研究が挙げる代表的なものとして、「転職するつもりだ<意志>」「宿を予約したつもりだ<思い込み>」「旅行に行ったつもりで、貯金する<仮想>」がある。その他、文脈的な微妙な意味合いの違いを反映して、<錯誤>(吉川 1989)、<意図>(中村 2017)、<評価>(角田 2011)、<仮想>と<思い込み>を統合した<信念>(高梨 2016)、<想定><予想・予定>(中村 2017)など、少なくとも9の用法名が確認できる。

こうした分類は、形にサポートされるとも、分類に明確な基準があるとも言えず、それぞれの概念が相互排他的でないので網羅的である保証もない。しかし、それらをもって即この分類に価値がないと断ずることはできない。なぜなら、語法研究においては分類が現象の正確な理解に向けた第一歩であり、それが現象分析の見取り図となるからである。すると必然的に、分類は、それそのものではなく、分類の妥当性を支える理論的基盤によって評価され

ざるを得ないということになる。

上記の分類は、「つもりだ」という形式の意味を精査する足がかりとなる。代表的な用法に絞って、「つもりだ」の語彙意味をめぐる分類に関する議論を素描すると次の通りである。〈思い込み〉と〈仮想〉は、態度保持者 x の P に対する信念的な意味を持つことから、〈意志〉対〈思い込み・仮想〉という対立が「つもりだ」の意味に接近する際に適切な粒度の分類であるとされることが多い(高梨 2016; 川島 2020 など)。

阿久澤(2022)は、これに対し、〈思い込み〉にも x の〈意志〉的行為が P の成否に「責任を負う」という「責任関係(responsibility relation, Farkas 1988)」が認められること、および、それが〈仮想〉では認められないことを示し(具体的な対立は(1)を参照されたい)、〈意志・思い込み〉と〈仮想〉という分類が「つもりだ」の語彙意味を分析するうえで適切な分類(の粒度)であると考えている。

(1) a. ?? 太郎は薬を飲み忘れたつもりだ。〈思い込み〉

b. 太郎は子どもになったつもりで、遊んだ。〈仮想〉 (a, b: 阿久澤 2022: 40, 36)

ここで注視すべきは、阿久澤(2022)の分類も、基準 A と $\neg A$ のような閉じた分類ではなく、その点で、相互排他的・網羅的である保証はなく、1 節冒頭の②③を(厳密な意味では)満たさない。また、〈仮想〉は従属節に現れやすいという傾向があるものの、明確に形にサポートされる分類であるとも言いきれず、その意味で①も限定的な形でしか満たさない。

したがって、この分類の価値は理論的基盤を持つか否かで測られるしかない。先に述べた通り、阿久澤の分類は「責任関係」という汎用的な意味概念が分類への動機を駆動している。これによって、それが実際に成功しているかは別問題として、「つもりだ」の語法研究を「意図報告(intention report, Grano 2017)」というより広範なモダリティ研究の文脈に位置づけられることに強みがある。例えば、英語の意図報告述語 *intend* との差分を検証できるようになるわけである。

このように、文法形式の分類を単なる眼前の事実の記述的分类に留めずに、分類がより広い文脈の中でいかなる位置づけを持ち、それが根源的な「何か」を明らかにできる視座となり得るかという視点が、分類においては重要であると思われる。

3. コントロール述語の語彙的意味と分類

生成文法におけるコントロール現象(主節の先行詞と埋め込み節主語の義務的な照応関係)は、その成立環境をめぐる、統語的・意味的観点から多くの議論がある。Akuzawa and Kubota (2024, 以下 A&K)は、コト節(=時制を伴う定形節)に見られるコントロール(例えば(2))は、コントロールは述語の意味的性質によって引き起こされるという立場をとり、該当する述語の語彙意味を精査している。

(2) ケン_iが_i[\emptyset _{i/ty} 転職する]ことを決意した。

一見すると、コト節をとる述語は意味的に雑多であるという印象を受ける。これを、A&K は(3)のように分類している。

(3) コト節をとるコントロール述語の意味分類と述語例：

- a. 試行(attemptive)：試みる、取り掛かる、手間取る
- b. 態度(attitudinal)：決意する、決心する、企てる、遠慮する、断念する
- c. 行為拘束(commisive)：誓う、表明する
- d. 叙実(factive)：後悔する、反省する、自負する
- e. 含意(implicative)：成功する、失敗する、自粛する、没頭する
- f. アスペクト(aspectual)：始める、続ける、止める
- g. 属性(dispositional)：秀でる、長ける、苦手だ

この分類も、「つもりだ」の語法分類と同様、1節冒頭の②③の基準をクリアしないし、①も(一部の意味クラスを除き)限定的にしか満たさない。したがって、例えば、「(3)の分類は各々が相互排他的でなく、妥当な分類とは言えない」といった批判は成り立つし、これは、ある面からは極めて正当な批判である。一例を挙げると、「態度」に振り分けられている「断念する」は「含意」的意味も持つのではないか、といった類の批判である。

しかし、2節でも述べたように、分類としての不十分さが即分析の価値を毀損するわけではない。こうした意味分類は、似た振る舞いを見せる雑多な集まりに共通する「何か」を見つけるにあたって有効であり(Vincent 2024: 632)、むしろ、(必ずしも厳密でない)何らかの基準による分類を切り口として、そこから鍵となる意味概念を特定するというのが標準的な接近法の一つであるとも言える(例えば Jackendoff and Culicover 2003)。

A&Kの主張の核心は、(3)の分類そのものではなく、そこで示される述語群に共通して見られる意味的特性が、*de se*態度(Chierchia 1989)と責任関係(Farkas 1988)であると論じた点にある。また、(3)の分類に基づく語彙意味の精査によって、長年議論されている埋め込み節述語の時制形態素の分布の謎(例：なぜ「～たことを試みる」は許容されないか)に一定の説明を与えた点にもある。2節での議論と同様、コントロールの語彙意味分類の価値も、そこから得られる理論的含意によって測られるのである。

当然、異なる理論的仮定(=(3)の述語群の補文は実質的には不定形節であるという仮定)に基づく陣営からのA&Kへの直接の批判として、例えば Fujii et al. (2023)があるように、論争は依然決着を見ておらず、A&Kの主張は広く合意を得たものではない。しかしこれは、分類そのものに対する批判ではなく、経験的事実を基にした議論の応酬であり、研究という営為におけるプロセスの一つに過ぎない。

4. 分類といかに向き合うか

1節冒頭で示したように、分類という作業において守るべき(暗黙の)指針は存在する。①②③は比較的マニュアル化しやすく、理解しやすい。特に②③は、その明確さと分かりやすさから、「モレなく、ダブリなく(mutually exclusive/collectively exhaustive; MECE, Minto 2021: 117)」という名を冠して、特にビジネスの世界において論理的な思考法として広く浸透している。

MECEは、しかしながら、一見理想的に思えても—それが手順としてある程度有益であることは間違いないが—、“よい”分類の必要条件ではない(し、十分条件でもない)点に留意

が必要である。実際に、自然言語の文法記述においてはこの指針を遵守できない場合もある。その際、提出された分類がいかなる文脈でどういう意味を持つのかを明示すること、すなわち、④の理論的基盤が分類の妥当性を直接・間接に支えるものとなる。したがって、MECE的な考え方に基づいて紋切りの視点でのみ分類を評価する態度は、手続き主義に陥る危険性があり望ましくない。

④が重要であることは、分類という作業自体が、程度の差はあれ何らかの分類者の理屈に支えられているということからも分かる。池田(1992: 94)は、「分類することは重要な基準を選ぶこと自体」で、「分類することは世界観の表明であり、思想の構築」であると述べている。分類という作業には、研究者による何らかの基準の選定—分類粒度の決定もここに含まれる—が必須であり、つきつめると、分類は主観的なものでしかあり得ないということである。それをデータとロジックで客観的と思えるものに近づけていくというのが分類という作業なのではないか。

そう考えると、冒頭の判定基準はあくまでも客観性を上げるための指針でしかなく、これに従えば完璧無比な分類ができるわけではない。分類とは、①②③と④を行き来して作り上げる作業であると言ってもよく、分類の技術的な難しさは、分類の過程や結果を理論的な観点—これは当然、形式化を志向する理論に限定されない—から繰り返し問うことで乗り越えるしかない。1節において、④の理論的基盤に依拠することが分類の技術的な難しさを解消する道筋になると述べたが、むしろそれ無くして分類という作業は成立しないのである。よって、分類がMECE的であっても、その分類の背後にある分類者自身の「思想」を提示できなければ、分類の価値は判断しがたいということになる。

上記の議論をふまえると、一見マニュアル化が容易そうな分類という作業ですら、職人技術的な側面を持つと言える。一朝一夕には得難い技能であるが、先行研究の概念を精査のうえ借りてくることで、不明瞭な基準やアドホックな(=経済性の低い)基準を立てることを避ける方策の一つとすることはできるだろう。当然、①②③を常に念頭に置いて眼前のデータをできるだけ正確に記述することは前提として、である。

5. おわりに

前節までの議論に基づいて、本稿の結論をまとめると以下の通りである。

(4) 分類の“よさ”は、手続き自体の正確さや厳密さの欠如によって即その価値が減じられるのではない。分類概念や導かれる結論が、いかなる理論的含意/広がりを持つのかという理論的基盤によっても判断される。

(5) 分類という作業自体が既に多分に理論的であり、“よい”分類は理論と不可分である。これはつまり、冒頭の分類基準を不十分な形でしか満たさず、一見すると明瞭性や経済性が低い分類であっても、分類外の体系に対して有益な知見を含む可能性があるということになる。こうした職人技による分類を、MECE的でないとして棄却せず、広く受け入れて集合知とし、現象の本質的な理解につなげることが求められる。

分類がマニュアルに従ってなされない以上、その体系は必然的に複雑性を帯びるし、紛

れも生じる。さらに観察可能なデータの限界といった理由から、時には分類に、各研究者の嗜好、思想、信念が入り込むことがあるかもしれない。したがって、眼前のデータの表面的で「きれいな」分類に固執せずに、分類者が責任をもって分類の理論的基盤を明示することが欠かせない。ここでの理論的基盤は、分類が思想の構築であるという前提に立って、研究者の分類を動機づけるナラティブと言い換えてもよい。

研究の積み重ねとともに、様々な分類体系はそれら相互の関係性が一見だけでは読み取りにくくなる。こうした集合知を研究コミュニティでいかに共有するかを模索する必要も出てくる。例えば、GrammarXiv (成田ほか 2024, Kubota to appear) のようなオープンアクセスデータベースを活用するなどして、分類体系の複雑性を鳥瞰できるようにすることも重要であろう。

主要参考文献

- 阿久澤弘陽(2022) 「「つもりだ」の意味的特徴」『日本語の研究』 18-1: 36-52.
- Akuzawa, Koyo and Yusuke Kubota (2024) The lexical semantics of finite control: A view from Japanese. *Natural Language and Linguistic Theory* 42: 849-896.
- Fujii, Tomohiro, Hiroataka Ogawa, and Hajime Ono (2023) Tense Alternation Generalization revisited: A reply to Akuzawa and Kubota. *Gengo Kenkyu* 164:111-123.
- 池田清彦(1992) 『分類という思想』 新潮社.
- 川島拓馬(2020) 『歴史的観点から見た「文末名詞文」の研究』 筑波大学博士論文.
- Minto, Barbara (2021) *The pyramid principle: Logic in writing and thinking (3rd rev. ed.)*. Harlow: Pearson Education Limited.
- 成田広樹・小林亮一朗・竹内士瑛伊・小町将之(2024) 「照応表現「自分」をめぐる諸問題：GrammarXiv を用いた論点整理と将来的展望」『慶應義塾大学言語文化研究所紀要』 55: 89-113.
- 高梨信乃(2016) 「「つもり(だ)」をめぐる：意志表現の指導の観点から」『神戸大学留学生センター紀要』 22: 1-20.
- 田窪行則(1998) 「文法(理論・現代)」『国語学』 193: 31-38.
- Vincent, Nigel (2024) Raising and control. In Mary Dalrymple (ed.), *Handbook of Lexical Functional Grammar*, 603-647. Berlin: Language Science Press.

付記

本稿の内容は JSPS 科研費 JP24K16053 の研究成果の一部である。